The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベトナム難民2世の語りにみるバイリンガル育成の可能性 : ライフストーリー・インタビュー手法を用いて
Author(s)	中川, 康弘
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2011, 7, p. 66-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25045
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

≪研究論文≫

ベトナム難民2世の語りにみる バイリンガル育成の可能性 －ライフストーリー・インタビュー手法を用いて－

中川 康弘（首都大学東京大学院博士課程）
nakagawanoya@yahoo.co.jp

Exploring the Possibility of Fostering Bilingualism as seen from Narratives of Second Generation Vietnamese Refugees : Using Life Story Interviews

NAKAGAWA Yasuhiro

キーワード：ベトナム難民2世、ライフストーリー・インタビュー、相互行為、自己肯定意識

要　旨

ベトナム難民受け入れから30年以上経過した今、親と異なる生き方を模索している難民2世も現れている。本研究ではそうした2世が、成人を迎え大学に進学した現在までベトナム及びベトナム語にどう向き合ってきたかに着目した。調査方法には聞き手との相互行為を重視するライフストーリー・インタビューを用い、2世の語りから日本社会におけるマイノリティ言語話者のバイリンガル育成の可能性を探ることを目的とした。その結果、語りから日越両国を行き来するバイリンガルとしての意識が垣間見えたと同時に、親とのやりとりでストラテジーを駆使しコミュニケーション力を高めている様子がうかがえた。そしてバイリンガル育成には、ルーツや言語文化を肯定的に捉える自尊感情と、それを育ませる契機となる周囲の理解や社会的支援の必要性が改めて示された。

1．はじめに

2007年1月、ベトナムはWTOに加盟、2010年1月には国連安保理非常任理事国の任期も終えた。日本との交流も目覚しく、在日ベトナム人登録者数は41,000人で、10年間で26,102人の増加となっている（法務省 2010）。この中には現代ベトナムから来日した者も含まれるが、これまで学術分野において在日ベトナム人といえば難民1世もしくはその児童を扱った研究が大半であった。その難民を背景とした在日ベトナム人も

2006年には家族呼び寄せ計画が終了し、難民の受入れ総数は8,500人強にすぎなくなっている[1)]。こうした状況下、難民家族の生活も多様化し、殊に日本で生まれ、また幼少時に来日した2世世代の成長が顕著であることは想像に難くない。

2．在日ベトナム人に関する言語教育研究

前述したように、在日ベトナム人への言語研究分野では、主としてコミュニティに暮らす難民家族を対象にしたものが目立つ。中でも、75年以降の難民流入が日本語教育分野の進展に影響を与えたことから、児童の日本語習得問題に触れたものが多くなされている。定住促進センターにおける教育の現状を述べた西尾（1986）、言語能力に焦点を当てた山口（1998）などが代表的なものとしてあげられる。また家庭におけるベトナム語習得状況についても、子供の言語生活の現状と社会が与える影響について述べた川上（1991）、インドシナ難民の親208名への意識調査をした国際日本語普及協会（1993）があり、最近では小学校1、6年生の2世の日本、ベトナム両言語の能力を測った長谷川（2009）がある。だがこれらはいずれも調査対象者を難民1世もしくは学齢期までの児童・生徒に限定しており、子供へのベトナム語教育の必要性を訴えつつも、家庭の経済状況や親子間のコミュニケーションの困難さからくる学業面の遅れ、調査時点での限られたベトナム語力、アイデンティティ喪失などが問題視されているのみとなっている。

こうした中、在日ベトナム人を同質的集団とみなす画一的な見方に疑問を投げかけ、彼らを「ベトナム系住民」と定義した川上（2001）の研究は、難民体験と日本での生活上の不安定さを構造的に解明しつつ、親族ネットワークの形成過程や在日ベトナム系住民がディアスポラ性を日常生活に取り入れていく様子を描き、在日ベトナム人を新たな視点で捉えなおす契機となった。ただし、個人に迫ろうとした8名のケースの記述については、調査対象はいずれも20代中盤から50代までの社会人であり、来日経緯、就労状況等を紹介するにとどまっている感が否めない。川上自身、著者あとがきで「越境する家族の物語はさらに続く」と締めくくっており、別の論文紙上（川上 2007）でも「親世代とは異なる生き方を模索しはじめている」難民2世の存在に言及していることから、2世世代についての今後の研究の必要性を暗に示していることがうかがえる。

日本の難民受け入れ開始は1978年。そこから30年以上が経過した今、成人を迎えた2世世代に着目することは意義あるものと考える。

3．本研究の目的

そこで本研究では、ベトナムを肯定的に捉え、大学進学後ベトナム語を学ぶようになっていった難民2世に着目する。ベトナム及び親の母語であるベトナム語に対する意識の変遷と、日越両国にルーツを持つことに対する現在の心境、また親子間のベトナム語使用状況を各人の語りから探っていく。さらに、調査データからマイノリティ言語話者のバイリンガル育成に必要な社会のあり方について考察し、それを記述していくことで、新しい在日ベトナム人像を描くことを目的としたい。

4．調査概要

4.1　調査協力者

協力者は、関東圏の大学でベトナム語を学ぶ難民2世のA、B、Cさん（いずれも女性)。調査時の年齢はA、Cさんが21歳、Bさんが20歳である。専攻や年齢がほぼ共通しているこの3名を選んだのは、ベトナム語を学ぶに至った現在までを追うことでバイリンガル育成の可能性を探ることができ、またマイナスイメージで捉えられがちだったベトナム難民研究に新たな見方を投げかけられると考えたからである。なお本稿では、子供のベトナム語に向かう意識の変遷を親の視点からも捉えることで、親にとってバイリンガルを育みやすい社会のあり方とは何かの考察を試みるべく、Aさんの父親AFさんの語りも一つのケースとして扱った。ここでは、難民2世3名の背景を記す。

表1　A、B、Cさんの背景

	大学の専攻	出生地	国籍	家庭内使用言語	住環境
A	ベトナム語	日本	日本	ベトナム語（一部日本語）	家族定住型（父親AFと母親、弟、祖母の5人家族）
B	ベトナム語	日本	ベトナム	ベトナム語（一部日本語）	家族定住型（両親との3人家族）
C	英語＋ベトナム語	ベトナム	日本	ベトナム語（一部日本語）	家族定住型（両親と妹の4人家族）

4.2　調査方法

調査は2009年6月から7月にかけ、3名の通う大学構内で1名につき約2時間のインタビューを実施、後日インタビューとメールによる補足調査を行った。またAFさんに

は、Aさんへの調査を終えた後日、自宅に招かれた際にインタビューを行った。

インタビュー調査にはいくつかの手法があるが、本研究ではライフストーリー・インタビューを用いた。この手法を取り入れたのは、個人の語りから社会を読み解くために聞き手との相互行為から生じた語り手の解釈内容を重視しているからである。永年にわたりライフストーリー研究に向き合っている社会学者の桜井厚は、語り手によって構成されたデータを、インタビュープロセスから独立させたテクストとして解釈できる、と仮定する従来のインタビュー調査に疑問を投げかけ、インタビュー進行中において語り内容が紡ぎだされる契機となる聞き手と語り手のメタコミュニケーションの次元での語りも分析対象にすべきだと主張する（桜井2002，2010）。そして聞き手は、語り手が「何を」語ったかのみならず、「いかに」語ったかにも着目し、語り手による心の内の表出は聞き手との相互行為によって作り出されるものと捉え、語り手と聞き手の2つの位相をあわせた全体がライフストーリーであると定義づけている。さらに、そうしたライフストーリー・インタビューの経験は、語り手自身に自己理解を促進する機会を与え、その後の生き方の創造の手助けをする役割も果たすこともあるという。これまでのベトナム難民研究は、経済、社会的困難や親子の言語コミュニケーション問題を前提にしたまなざしで、多様な背景を持つ在日ベトナム人を「難民」として一括りにし、語り手の語る出来事からその全体像を捉える傾向があった。本研究では語り手自身を構成する要素に聞き手の存在を視野に入れ、インタビューを調査者と協力者の相互行為と捉える構築主義に立ったライフストーリーという手法を用いることで、語り手にとっての自己理解の一助となりうるよう意識しながら、個人としての2世の人生経験を描くようにつとめた。

聞き手との相互行為によりデータが形成されるという立場を取る以上、筆者の存在が何者であるかという点も語り手には重要になってくる。筆者はかつて、青年海外協力隊員としてのベトナム北部ハノイ在住経験と語学習得、その後の研究活動等でベトナムとは公私の関わりがある。初対面である協力者にはそのことに触れた上で、自身の背景が調査に与える影響を意識しつつインタビューを実施していった。

なお、ライフストーリーの分析枠組みには、マスターナラティブ、エピファニー、モデルストーリーといった語り手の人生経験を解釈する概念がある（桜井2002，2003，2005）。マスターナラティブとは、幼児のいる母親は育児に専念すべきだという「3歳児神話」や、いじめはいじめられる側に問題があるとされていた「いじめの捉え方」に代表されるように、ある社会や時代に支配的な語りで、それが語り手自身の規範や評価を決定付けていくものである。エピファニーとは、忘れがたい刻印としてその後の人

生の転機となる個人的経験であり、しばしば制度的構造と結びつくものと定義される。個人で抱えていたDV被害が社会問題化され、その声が高まるにつれ公的制度と関連しシェルターの設立に結びついていく過程などがその代表例といえる。そして語り手が自らを語る際の参考とする、コミュニティで伝承され流通している語りをモデルストーリーと呼び、解釈時に本人の実体験から紡ぎだされた語りと区別される。前述したマスターナラティブとモデルストーリーは共通する部分もあるが、前者はより広い社会や時代を覆い、語り手は受身的にその規範に服さざるを得ない中での語りなのに対して、後者は地域、エスニシティなど、何らかの共通性を含む広義のコミュニティを範囲としており、語り手は時に自らを能動的に語る際の参考として扱う。被差別部落問題を例にとると、かつての悲惨、貧困からたくましさ、アイデンティティの目覚めといった経緯での語りが語り手の属するコミュニティ内で流通し、それを自らの語りの中に引用していくケースが例として挙げられる。

本研究では、マスターナラティブ、モデルストーリー、エピファニーに着目することは語り手が影響を受けた社会を読み解く可能性が出てくるという立場をとる。よって語り手と聞き手の相互作用に着目しつつ、これらの枠組みを用いてデータを解釈していく。

5．調査結果

以下、A、B、Cさんのベトナム及びベトナム語に向かう意識の変遷と、ベトナム語使用状況、父親AFさんの語りに分け、文字化データを記述していく。なお、筆者の発話は＊で示し、他の表記方法については本稿の最後にある表2に記した。

5.1 ベトナムおよびベトナム語に向かう意識の変遷

5.1.1 Aさんのケース

Aさんは南部出身のAFさんと北部生まれで南部育ちの母親との間に生まれた。出生時から日本国籍であるが、子供の頃から公共や学校場面で周囲を意識していたという。

データ1（ベトナムに対する否定的感情：Aさん）

＊：買い物とか、外では両親とはベトナム語で話していたんですか？

A：はい。でも小さい頃からそれ結構気にしてて、両親とか大丈夫って言うんだけど // ＊：その、公共でベトナム語しゃべるってこと？// はい。公共の場所なんかでは、なんかその目が嫌で、もうできればしゃべらないでって（親に）言って。

＊：その、見られるっていうのは実際の経験なの？

A：思い込みもあるのかもしれませんけど、買い物していて聞こえてきてこっちを振り向いてなんかぼそぼそ言っているっていうのはわかるんで。特に意識するようになったのは小学校の時。例えば、親はベトナム人なんだとか言うと、友達に//＊：うん//ベトナム人なんだとか見下し方を感じて、// ＊：ああ//だから隠してました。

＊：あルーツがベトナムだってこと？// A：はい//

A：そう言われるのが嫌だったんで。中学でもそんな感じで。

＊：でもそんなの変じゃん、ふざけんなとか言わなかったの？

A：うーんありましたけど、もうなんかしょうがないなって思って//＊：へえ//だから話題で外国人のことになると、びくっとしたりして。

「隠してました」「（ベトナム人と）言われるのが嫌」と語るほど、当時はベトナムにルーツを持つことを肯定的に捉えていなかった。だがそれは高校に入ってから変化する。

データ2（ベトナムに対する肯定評価のきっかけ：Aさん）

A：高校で進路決める時に、担任に境遇生かしたほうがいいって言われて、あとその頃ベトナムもテレビでやったりして皆も料理とかアオザイとか興味持って、私もじゃ自分の国だしって思って。

＊：自分の国って言ったね// A：えっ？// いや国籍上は、（・・）その日本人だから。

A：あそっか// ＊：うん// そう、で、せっかくだから勉強しようって思ったんですね。

＊：ああじゃ先生がそう言ってくれたのは// A：そうすごい// すごい。

A：大きい。あと友達ももったいないとか言ってくれて//＊：それどう思った？// やっぱうれしくて。皆すごいって言ってくれるから、私もどうだ、みたいになって（笑）。

こうしてベトナムを肯定的に捉えるようになったAさんは、ベトナム語にも興味を持ち始め、大学でベトナム語を専攻するまでに至っている。

データ3（大学でベトナム語を専攻するきっかけ：Aさん）

A：高2の時かな、父とベトナムに行ったんですよ。で店の看板見てああこういう意味かとか// ＊：ああ// 読んで意味はわかるんで。で（ベトナム語）始めたら

やっぱ面白いって思って。もっとできるようになりたい大学で勉強したいって言ったんです// ＊：あ親に？// はい。両親も勉強してくれたらすごいうれしいって言ってくれたんで。

大学生になった現在も周囲の偏見を全く感じなくなったということはない。だが一方では、日本人のベトナムに対する見方も意識していることが次のデータからうかがえる。

データ4（日越両国にルーツを持つことに対する現在の心境：A さん）

＊：まだその見下し？みたいなこと思って気にすることとかはあるのかな。

A：ありますね// ＊：例えばどんな？// いや（・・・）何か落ち度があると、その原因が、やっぱベトナム人だからかなって思われてしまうとかかな// ＊：ああ// ですかね。

＊：そういう意識があるんだね。

A：そう、でも確かに親が音量上げたまま夜遅く歌聴いていたり、友達来ると騒いだりして、近所に迷惑かなって思うこともあるので、その点はベトナム人だからと思われても// ＊：ああ// 仕方がないことも。だから親にそこしっかりしたほうがいいよ、日本のルール守るようにって言うこともあります（笑）。

5.1.2 Bさんのケース

中部出身の両親は80年代に難民として来日、2年後 B さんが生まれた。現在もベトナム国籍でありベトナム名であることから、小学校時代はよく名前に悩んだという。

データ5（ベトナムに対する否定的感情：B さん）

B：ベトナム人だから（ベトナムが）嫌になるってことはなかったんですけど、名前が外国人なんで、学年変わると先生も変わるじゃない// ＊：名前ね// ですか。そう。そういう時名前なんて呼んだらいいですか？とか、毎回名前確認されることが嫌で// ＊：ああ// した。だから自己紹介とか一番嫌で。必ず名前言うと聞き返されるんで。

＊：じゃあ、からかわれたなんてことも？

B：友達はなかったんですけど、小さい子供たち？ そういう子には呼び捨てされたりとか// ＊：ああ下の学年とか// そうです下の学年です。だから気分悪くなったことも。

＊：そういう時、周りが悪いと思わなかった？なんでそう言うんだって。

B ：それは思いませんでしたね。恥ずかしいっていうほうが強かったですね// ＊：ふーん//もう、だんだん対応が面倒くさくなって。はあまたか、みたいな。

Bさんは、学校生活で目立ってしまうベトナム名に触れる周囲に対して「恥ずかしい」「めんどくさい」という気持ちを持っていた。しかしその心境も高校時代に変化する。

データ6（ベトナムに対する肯定評価のきっかけ：B さん）

＊：その、アピール意識みたいなのっていつ頃から思ったの？

B ：高校の時ですね。しゃべれるんだっていうとすごいって見られるじゃないですか高校生ぐらいになると語学できると// ＊ああ//（・・）だからからかわれること自体なくなってきますし、そのくらいからプラスイメージに変わってきたんだと思います。

ルーツを積極的にアピールするようになったBさんは、大学でベトナム語を専攻していく。その理由に、両親とよりコミュニケーションを図りたいということを挙げていた。

データ7（大学でベトナム語を専攻するきっかけ：B さん）

＊：今改めてここ（大学）でベトナム語勉強してるけど// B：はい// それはどうして？

B ：親ともっと話したいという気持ちですね。もちろん普段は問題なく普通に（ベトナム語）話してますけど、家族と関わりあう時間は長いんで。私がうまく言えなくて親が面倒だって思うこともあると思うんです// ＊：へえ// よね（笑）。だからここ（大学）で勉強するって言ったら喜んで、母とか家で教えようとかはりきって（笑）。

大学でベトナム語を学んでいるBさんは、次のデータ8で、ベトナムの良さを周囲の日本人に広めたいという現在の心境を語っている。

データ8（日越両国にルーツを持つことに対する現在の心境：B さん）

B ：日本のほうが上じゃないですか経済的に。だから本気で見下されてる感があってイラってくることもあります。// ＊：イラっ？// そう例えば学部のスタディツアーで先輩がお腹壊したって言ってベトナムの悪口言うと、そんなの自分が弱いだけだ、タイだってどこだってそれじゃだめだよ// ＊：あ食べ物でね//とか。

＊：Bさんは大丈夫なの？

B ：実は私も気持ちはわからなくもないんですけど（笑）。でも、気持ち的にややこ

しいんですけど、好かれてほしいんですねベトナムを。自分はベトナム人だし、自慢するみたいで嫌なんですけど、ベトナムの価値を高めたいって思いがあるんですよね。こんなベトナム人もいるんだぞみたいな。

＊：え、そのこんなっていうのは？例えばその、戦争とか貧しいとかのイメージかな。

B：それもありますけど、生活大変だったり犯罪とかそういう人たちばかりじゃない、がんばってるんだっていう// ＊：ああ// ことなんですけど。

5.1.3 Cさんのケース

両親はベトナム南部出身。父親は難民として80年代に来日し、Cさんは父親の出国直前に生まれ母親と３歳で来日、小学校４年時に名前を変え、日本国籍を取得している。

データ9（ベトナムに対する否定的感情：Cさん）

＊：その国籍変わった時とかって、なんか周囲の変化感じた？

C：まず名前を日本人っぽくしたんで、友達はどうしてって思った// ＊：ああ// んじゃないかな。逆に目立っちゃうみたいな。カタカナで呼ばれるのが嫌だったんで漢字の名前にしたんですけど、それ結構まあびっくりしたっていうか、そんな感じで。

＊：そういうのなんか、嫌だった経験とか、具体的に覚えてる？

C：ああ5年のとき友達とけんかして// ＊：うん// でベトナム人国に帰れよって言われたり。それはふとしたけんかなんですけど// ＊：その時どう思った？// うっそうみたいな（笑）。なんかこっちからしたらお前も外人じゃんとか思ったりして。でもたぶん疲れちゃったんでしょうね。だから日本語しかしゃべれないって言って。

＊：へえ、じゃベトナム語は？

C：あもう全然しゃべれないってうん。ほんとは話したり聞いたりすることはできるんだけど、そういうなんつうの、偽りもありましたね（笑）。

＊：それ周りとか日本のほうがおかしいとは思わなかったかな、もともとだってね、ベトナム語やめさせる、そういう圧力がある日本の社会的環境が問題だって。

C：まあそういうのも、今考えるとあるなって思ったんですけど、当時は特にそこまで// ＊：そう// こんなもんなのかなって（笑）。

「(ベトナム語）全然しゃべれない」という語りから、日本国籍となってもルーツを隠

そうとする態度がうかがえるが、Cさんもまた高校に入ってから意識に変化が訪れる。

データ10（ベトナムに対する肯定評価のきっかけ：Cさん）

C：高校で英語に興味持って。そこからかな、ベトナム語にすごい興味持ちはじめたの// ＊：英語がきっかけなんだ//そうですね、特に、私、国籍変えた時漢字にあこがれていて、名前は漢字漢字って言っていたんですけど、高校の時にすごい後悔して（笑）。

＊：じゃその時から結構ベトナム人ってアピールするようになったの？

C：そうですね。高校の友達にもベトナム語すごいみたいに言われたし、私も自慢げに言ったりして。今もあるけど友達にしゃべってとか言われたりして（笑）// ＊：ああわかる（笑）// 実は今も勉強しているんだけど（笑）。

＊：でもそういうこと言われてどう？しゃべってとか言われて。

C：人によりますね。でも関係悪くなるとよくないから、自分のキャラの一つかなって// ＊：キャラ？// 例えばダンスできるとかと同じで、プラス思考って感じで（笑）。

ここではベトナムに対する意識の変化と、ルーツを「キャラ」とし、人間関係を構築する様子が語られている。そして大学ではベトナム語を学ぶようになっていく。

データ11（大学でベトナム語を専攻するきっかけ：Cさん）

C：「キャラ」として友達なんかに（ベトナム語）しゃべれるって言ってたんですけど、大学考えるようになってやっぱりベトナム語完璧にしたいと思うようになって。

＊：それでここ（大学）で勉強しようと。

C：はい。母とかもそれ聞いて大賛成で。ああやっぱ子供が（ベトナム語）勉強してくれるとうれしいんだなって// ＊：うん// 思って。じゃ自分も頑張ろうって思って。

そして現在の日越両国への思いは、インタビュー中の言語使用からもうかがえた。

データ12（日越両国にルーツを持つことに対する現在の心境：Cさん）

C：来月、ベトナム帰るんです3週間ぐらい// ＊：あ家族で？// いや一人で。一人で行くのは初めてなんですけど// ＊：何年ぶり？//あ、もう（・・）4年ぶりですかね。

＊：へえ。そういえばベトナムへはĐi（行く）、Vê（帰る）、どっち？なんか今、使い分けていたでしょ？

C：そうですか（笑）。どうですかね（笑）。お父さんたちにはベトナム語だからVê（帰る）って言うかもしないけど。私はĐi（行く）のほうが大きいかも。

＊：ちょっと外国って感じ？

C：でもなんか、実際飛行機降りると懐かしいみたいな// ＊：うん// そういうのあるんですよね。どうなんでしょうね（笑）。

5.2　ベトナム語使用状況

3名の家族は本国に親戚がいるが、日本では難民コミュニティに属さない家族定住型の住環境にいることから、ベトナム語使用環境は家族内が中心であった。ここでは両親とのベトナム語使用状況と、ベトナム語習得について触れたデータを扱う。

まずAさんの場合、両親からベトナム語を教わった記憶はない。しかし家族だから理解しあえる部分も多く、やりとりに特に困難を感じたことはないという。

データ13（家庭でのベトナム語使用、学習状況：Aさん）

＊：親はベトナム語教えなかったの？

A：それはなかったですね。たぶん、学校とかちゃんと出てないから、読み書きとか教えられなかったんじゃないかな。だから私も話したり聞いたりはだいたいできるけど、読み書きは、今改めて勉強しています。家にある小説とかも読んだりして。

＊：読み書きはね。でも会話でも、例えば進路相談とか、抽象的な話題みたいなのは？

A：まあ、その辺はベトナム語と日本語をミックスさせたりしていたので。

＊：よく親子コミュニケーションがうまくいかないって話聞くんだけど、そういうのは？

A：他人じゃわからないって思うかもしれないんですけど、家族だから//＊：ああそうか// 特に困ったってことはないですね。

Bさんも、Aさん同様、両親からベトナム語を教わった記憶はない。Bさんによると、ベトナム国籍の両親は日本語も不十分なので、ベトナム語のやりとりに自分自身が困難を感じる時もあったが、聞き返しや言い換えなどをして意思疎通を図っていたという。

データ14（家庭でのベトナム語使用、学習状況：Bさん）

＊：ベトナム語は教わったって記憶ある？

B：いやないですね。毎日の生活の中で自然に覚えたって感じですね。

＊：読み書きとかも、教わったりしなかったの？

B：ああ全然です。今だから授業で勉強になっていますね。新聞読んだりして。

＊：じゃ親と会話で困ることあった？

B：複雑な話で言えない時はたまにありますけど、まあなんとか、わたしんちは（笑）。

＊：例えばこの大学入る時の相談とかそういうのは？

B：その程度ならたぶん。単語わからなくても遠まわしに言って、通じてましたね。聞き返して、別の言葉で言ったり、わからなかったらそのままほっといたり（笑）。

一方、Cさんは小学校時代にテキストで勉強した経験があるが、数か月しか続かなかったそうだ。だが両親との会話ではこれまで大きな問題にはならなかったという。

データ15（家庭でのベトナム語使用、学習状況：Cさん）

＊：お父さんお母さんからベトナム語勉強したことってある？

C：そういえばありますね。小1の時かな、テキスト使って書いたりしてたけど、でも数か月でやめちゃいましたね// ＊：なんでだろ// いや覚えてないですけど、そんな書かないし、やっぱたぶんうわーってなったんでしょうね（笑）。

＊：でも中3の時とか高校になると進路の話とかする// C：はいはい//でしょ？その時ベトナム語とか日本語で、ああ通じないなとか困ったことってなかったの？

C：それは大丈夫ですねうん。日本語言ってわかんないとこう、近い言葉でベトナム語で説明してミックスさせて。時々親に何語って言われるけど（笑）。

声調言語であるベトナム語は地域によって発音が異なる。Aさんの母親は北部生まれであるが南部育ちであり、他の両親も中部、南部出身ゆえ家庭では主にその方言が使われる。本国のベトナム人の場合、方言には多少困難を伴うがメディアや当該地域にいる人々との接触を通じて理解できる者が多い。コミュニティに属さず両親のベトナム語に触れてきた3名は、首都ハノイの北部方言を扱う大学の授業にはじめ違和感を覚え、中でもBさんは、北部出身のベトナム人教師や日本人教師の話す北部ベトナム語に戸惑いを感じたそうだ。だが今はベトナム語を使い分ける意識も出てきたという。

データ16（北部ベトナム語についての意識：Bさん）

＊：家では中部、学校ではハノイとか北部弁勉強していて、日本語もあるから3言

語だ。

B：かもしれないですね（笑）。来年ハノイに初めてスタディツアーで行くので、北部弁使って話そうと思って（笑）。

＊：使い分けるんだね// B：はい// でも、家ではお母さんとかは中部// B：そう、だから何その発音とかって言われるんだけど（笑）。//

以上、3名のベトナム及びベトナム語に向かう意識の変遷と、ベトナム語使用状況についてのデータを記した。

なお調査後、筆者はベトナム語に向き合う姿勢を親の視点からも捉えるべく両親への調査を3名に依頼している。だが北部滞在経験を持ち北部方言を話す筆者とのやりとりで、当時の記憶を呼び起こすことやベトナムへの印象の違いからくる意見の相違を避けるためか、調査できたのは現在もビジネスでハノイを訪れることの多いAさんの父親AFさんのみであった。1名の語りゆえ一般化は困難であるが、一つのケースとして、親の立場から見たAさんの意識の変遷と、子育てを通じて感じた継承語教育についてのAFさん自身の語りを記述していく。

5.3　父親 AF さんの語り

AFさんは70年代後半に難民として来日。定住センターで妻と知り合い、日本国籍を取得後Aさんが生まれた。現在はベトナム関係のビジネスに従事している。ベトナムへの思いが揺れ動く娘の父親として、AFさんはどう考え、行動したのだろうか。

データ17（現在までのAさんへのベトナム語教育について：AFさん）

＊：あの小学校中学校の時に// AF：うん// Aさんがクラスメートに変なこと言われたとかベトナムのご両親ということを隠したがったって聞いたんですけど。

AF：ああ（笑）。例えば女房と学校行って、子供をベトナム語で呼んじゃうんだよね// ＊：はいはい// 子供が知らん顔して、そんな名前じゃないって言って、知らん顔して逃げて行っちゃったの。それ見てこれは恥ずかしいんじゃないかなって思ってね。女房と話したんです。お母さん学校ではベトナム語を話さないほうがいいってね。

＊：でもそれは日本がおかしいですよね。ベトナム語で名前を呼ばないでって言われた時、おかしくないと言い続けなかったんですか？ 何か行動はしなかったんですか？

AF：その時は行動できなかったんだよね。（・・・）まあちょっとあきらめたんだね。

子供の人生はまだ長いから、もうちょっと理解ができるまで僕は我慢した。

＊：それは、いつ頃ですか。そのAさんがベトナムに対する理解ができたのは。

AF：高校生の時// ＊：ああ// お父さんベトナム語話したら友達ほめてくれたよって。それ聞いて、もう隠すことないから応援していくって言ったの（笑）。僕は子供にベトナム語だけ話すベトナム難民の人知っているけど、彼らは日本を理解するのが遅い。

＊：理解というのは、その（・）ベトナム人が日本社会を理解していないって言うこと？

AF：そう。日本は日本語できなきゃしょうがないでしょ。実際に僕も大変だったし。でも、うちはAちゃん大学行けたし、ベトナム語だって今勉強している。

ここでAFさんは、Aさんの高校時代にベトナム語使用を「応援していく」ようになったことを語っており、データ1にある、高校からベトナムを肯定的に捉えるようになったというAさんと語りの内容が一致していた。一方で、データ後半で自分の子供にベトナム語だけ話す他のベトナム人を「日本を理解するのが遅い」と語っていたAFさんに、筆者はベトナム語継承に対する親の姿勢を感じ取り、調査を続けていった。

データ18（日本におけるベトナム語継承の現状：AFさん）

＊：本当ならベトナム語でも不自由しない環境で、ベトナム語教えたいですよね。

AF：あのね、大事なことだけど、ベトナム語何のため？（・・・）まず何のため教えるかでしょ？

＊：（・・）まあ親子のコミュニケーションとか（・）。

AF：親が日本語できればそのほうが子どもの将来楽ですよ// ＊：まあ// もちろん2つの言語ができればいいけど現実は違うでしょ。日本ではベトナム語ニーズないし、ベトナム政府は日本みたいに海外に学校作ることできない。ベトナム語守るシステムないから。親は時間使って計画したら両方話せるようになるかもしれないけど、それは忙しい（笑）。

＊：まあそうですね（笑）。

AF：（・・）ベトナム語大事だって言う学者よくいるけど、まず一つの言語を勉強して考えることができるようになればいい。だから親がベトナム語しかできないのはだめ。親もやっぱ日本語上手にならなくちゃだめ// ＊：まあ（・・）確かに// 絶対そう。

データ13でAさんは、親がベトナム語を教えなかったことについて「学校とかちゃ

んと出ていないから」と語っている。AF さんはその点に触れず、日本でベトナム語を継承する現実の難しさに触れつつも、親の日本語習得の重要性を語っていた。

6．考察

まず5.1にあるベトナム及びベトナム語に向かう意識の変遷について、3名がベトナムを意識し始めたのは、データ1、5、9にあるようにいずれも小学校時代であった。A さんは自らのベトナム語力やエスニックルーツを隠そうとし、C さんは日本国籍を取得する際に漢字名にこだわり、けんかの際に友達に「国に帰れよ」と言われた体験を通じて自らのベトナム語力をも隠すようになっていった。またベトナム国籍の B さんはベトナムを否定的に捉えることはないまでも、ベトナム名であることに対する周囲の反応に敏感になっていた。これらのデータからは、親から受け継いだルーツや自身のベトナム語力を否定的に捉え、周囲の偏見を許容する態度をとっていたことがうかがえる。また AF さんについても、はじめは外でのベトナム語会話を気にするAさんに「大丈夫」（データ1）と言っていたが、学校で名前を呼んでも無視するAさんの態度からその恥ずかしさを感じ取り、妻と相談した結果「(ベトナムの）理解ができるまで僕は我慢」（データ17）していた。この語りからは、将来娘の成長過程でベトナムへの意識変化を期待する父親の気持ちがうかがえるが、一時的ながらもAさんを追い込んだ周囲に対して特に行動を起こさなかったことが、「まあちょっとあきらめたんだね」（データ17）という語りからも読み取れることから、AFさんを含めた4名は、当時日本社会の言説傾向であるベトナムを見下し、画一的に見る「マスターナラティブ」に従っていたと言える。

だがやがて、ベトナムに対する意識は高校入学後、肯定評価に変化する。データ2、6、10にあるように、ベトナム語力やベトナムを肯定評価する高校の友人や教師の言動がきっかけとなっていた。また A さんの語りにもあるように、時代の流れによりテレビ等を通じてベトナムが多様な見方をされるようになったことも肯定意識の形成に影響を与えていたことがデータ2でわかる。つまり、それまでマイナスイメージで捉えられがちであったベトナムが、時代の流れにより料理、アオザイといった側面も注目されるようになり、日本社会では新しいマスターナラティブが形成されていった。そして何かの形でその影響を受けた同時代の友人、教師など身近な他者との出会いが「エピファニー」となり、自らの境遇を肯定的に捉えるようになったと解釈できる。多くの難民2世がいる中、3名は家庭環境や属性がほぼ共通しており、肯定意識生成のきっかけとなるエピファニーの受取り方にも個人差があるので一般化はできないが、マイノリティ言語文化

に属する子供をバイリンガルに育てるためには、早い段階から当該言語文化に対する自尊感情育成が不可欠であり、母語・継承語教育の内容には当事者への支援のみならず、子供を取り巻く周囲への意識育成が極めて重要であることが示唆される。

ベトナムを肯定評価するようになった3名は、やがて大学でベトナム語を専攻するに至る。そこで彼女たちに共通しているのは、いずれも両親との関係性の中でその動機が語られている点である。Aさんは訪越時にベトナム語の面白さを経験し、それを両親に伝え「すごいうれしいって言ってくれた」（データ3）こと、Cさんはベトナム語を学ぼうという思いを両親に伝え「大賛成」（データ11）されたことがきっかけになり、Bさんも大学でベトナム語を学ぶ動機を語る際に、親と今以上にコミュニケーションしたいという思いとともに、「母とか家で教えようとかはりきって」（データ7）と親の気持ちを同時に表出していた。無論、ベトナムを肯定的に捉え、また親の応援があったとしても、難民2世のすべてがベトナム語を専攻するとは限らない。しかし3名からはベトナム出身の両親への配慮も垣間見えつつ、何より両親とベトナム語で分かりあいたいという気持ちがベトナム語を専攻するに至った強い動機としてうかがえた。親子の心的な絆も母語継承促進に関係してくるという一つの事例としてここに記しておきたい。

次に、5.2で述べたベトナム語使用状況について、親子間のコミュニケーションで3名は困ることはなかったと語っている。読み書きのやりとりは体系的に学んでないゆえ見られなかったが、会話については、進路相談などの話題でもデータ14にあるBさんの語り「聞き返して、別の言葉で言ったり、わからなかったらそのままほっといたり」や、データ15のCさんの語り「日本語言ってわかんないとこう、近い言葉でベトナム語で説明してミックスさせて」にあるように、パラフレーズ、コードスイッチ、回避などストラテジーを駆使している様子がうかがえた。これまでの先行研究の多くは、難民子弟のコミュニケーションには親子双方の言語能力による困難が生じていると結論付けていたが、見方を変えれば、3名はむしろ両親とのやりとりで多文化社会に必要な交渉力を身につけているとも言えるのではないだろうか。このことから、母語・継承語教育研究は年少時から成人を迎えるまでを見据え、親子間の言語能力の差による困難さのみならず、交渉過程においてコミュニケーション力を高める要素があるのだという点にも着目していく必要があると考える。

また大学入学後、北部方言に触れたことが学習意欲の促進に結びついていたことから、それも「エピファニー」になっていることがわかる。中でもBさんからは、北部方言を学習することにより両親が使う中部方言との違いをめぐる家庭でのやりとりや、方言の使い分けを試みようとしていることがデータ16でうかがえ、本国のベトナム人とは異な

る在日ベトナム難民2世ならではの言語使用意識が生成されていることは注目に値する。

以上、ここまでは主に語り手によって表出、構成されたテクストにライフストーリーの概念枠組みを用いて考察を行った。次からは、聞き手である筆者との相互行為に着目してのデータ考察を試みたい。

まず今回、コミュニティで伝承され、流通しているモデルストーリーは確認されなかった。周囲に対する当時の心境については、個々の具体例をもとにした経験としての語りが多いことが、「しょうがない」(データ1，Aさん)、「またか」(データ5，Bさん)、「こんなもんなのかなって（笑)」(データ9，Cさん）といった感情表出、評価的態度を表す語りでうかがえる。そして、そうした感情表出は「ふざけんなとか言わなかったの？」(データ1)、「そういう時、周りが悪いと思わなかった？」(データ5)、「日本のほうがおかしいと思わなかったかな」(データ9）といった、表出された語りの裏づけ確認のための筆者の問いかけ後に語られていることから、3名の心境は聞き手と語り手の相互行為の中で得られたと言える。

次に日越両国にルーツを持つことに対する現在の心境について、3名の語りからは、幼少期、青年期を通じて日本社会に根付いている者として、ベトナムを客観的に捉え、時に両国を行き来する意識が潜んでいることが確認された。データ4ではAさんが、夜騒ぐ親の行動に対し「日本のルールを守るようにって言うこともあります」と語り、データ8ではBさんがベトナムの悪口を言う先輩を非難する一方で「私も気持ちはわからなくもないんですけど」と共感の姿勢を示している。データ10ではCさんが初対面時にルーツやベトナム語力を聞かれるエピソードを語り、面倒くさいと思いつつも「キャラの一つ」と処理し、人間関係構築のためにルーツを使い分けていることが読み取れる。そして、こうした両国のルーツを行き来する語りは、主に聞き手である筆者との相互行為の中で生じている。以下はデータ2のAさんとのやりとりの一部である。

データ2（ベトナムに対する肯定評価のきっかけ：Aさん）より

A：高校で進路決める時に、担任に境遇生かしたほうがいいって言われて（中略）私もじゃ自分の国だしって思って。

＊：自分の国って言ったね// A：えっ？// いや国籍上は、(・・）その日本人だから。

A：あそっか// ＊：うん// そう、で、せっかくだから勉強しようって思ったんですね。

筆者は、出生時から日本国籍のAさんがベトナムを「自分の国」と語っていること

に反応し問いかけている。だがAさんは「あそっか」という表現を伴いそれを意識化しつつも、そのまま語りを続けていた。ここから言語使用のレベルでルーツの使い分けが無意識に行われていることがわかるが、こうした例はCさんとのやりとりでもうかがえた。データ12では、筆者がCさんから無意識に表出された「行く」「帰る」の使い分けを指摘したことで、Cさんに意識化され、人によって使い分けるという説明がなされている。

データ12（日越両国にルーツを持つことに対する現在の心境：Cさん）より

C：来月、ベトナム帰るんです3週間ぐらい// ＊：あ家族で？// いや一人で。一人で行くのは初めてなんですけど// ＊：何年ぶり？// あ、もう（・・）4年ぶりですかね。

＊：へえ。そういえばベトナムへはĐi（行く）、Vê（帰る）、どっち？なんか今、使い分けていたでしょ？

C：そうですか（笑）。どうですかね（笑）。お父さんたちにはベトナム語だからVê（帰る）って言うかもしないけど。私はĐi（行く）のほうが大きいかも。

またBさんからは、筆者の問いかけでベトナムをアピールする際の潜在意識が表れた。

データ8（日越両国にルーツを持つことに対する現在の心境：Bさん）より

B：実は私も気持ちはわからなくもないんですけど（笑）。（中略）ベトナム人だし、自慢するみたいで嫌なんですけど、ベトナムの価値高めたいって思いがあるんですよね。こんなベトナム人もいるんだぞみたいな。

＊：え、そのこんなっていうのは？例えばその、戦争とか貧しいとかのイメージかな。

B：それもありますけど、生活大変だったり犯罪とかそういう人たちばかりじゃない、がんばってるんだっていう// ＊：ああ// ことなんですけど。

ここでは、筆者が「こんなベトナム人」の持つ意味を確認したことで、ベトナムの価値を高めたいと思うBさんの意識に、同国人のマイナスイメージ生成者（「生活大変だったり犯罪とかそういう人たち」）の存在が潜んでいることが読み取れる。

データ2、12で、両国にルーツを持ちつつも言語使用面ではそのルーツを無意識に使い分けていることがA、Cさんからわかり、データ8ではベトナムのイメージ向上という面について意識的に、いわば「日本人の視点を持つベトナム人」として他の同国人を評価していることがBさんから解釈できる。後者に関して、Bさんがこうした思考をするようになったのは、ベトナムの見方に関するマスターナラティブの存在と周囲の肯定

評価をエピファニーとしたかつての経験が影響していると考えられ、同内容の語りはAさんのデータ4からも見られるが、何よりもここに挙げたデータは3名の語りに対する筆者の問いかけにより導き出されたものであることから、インタビューを聞き手と語り手との相互行為とするライフストーリー手法ならではの成果であると言えよう。そして今回、筆者との相互行為により無意識下の言語使用を意識化した経験と、また既に意識下にある思考形式を言語化した経験は、3名にとっても自らのルーツについての理解を促進する機会となり、将来、両国の言語文化を併せ持つバイリンガルとしての生き方を創造していく何らかの手助けとなったとしたら、ライフストーリー・インタビューという研究手法はその役割を十分に果たしたことになるだろう。

なお、相互行為に着目していくと、聞き手の反応が語り内容に影響を与えるケースも出てくる。今回それはAFさんとのやりとりに見られた。以下データ18の抜粋を記す。

データ18（日本におけるベトナム語継承の現状：AF さん）

＊：本当ならベトナム語でも不自由しない環境で、ベトナム語教えたいですよね。

AF：あのね、大事なことだけど、ベトナム語何のため？（・・・）まず何のため教えるかでしょ？

＊：（・・）まあ親子のコミュニケーションとか（・）。

AF：親が日本語できればそのほうが子供の将来楽ですよ// ＊：まあ// もちろん2つの言語ができればいいけど現実は違うでしょ。日本ではベトナム語ニーズないしベトナム政府は日本みたいに海外に学校作ることできない。ベトナム語守るシステムないから。（以下省略）

筆者の問いに対し、AF さんは逆にベトナム語の必要性に疑問を投げかけている。だが、ここでは2秒沈黙した後の「まあ」という筆者の反応と、AF さんが子供の将来には親に日本語力があるほうが楽だと語った直後の筆者の「まあ」に注目したい。「まあ」という反応で筆者が十分に同意していないことを察した AF さんは、データ17から18に続く親の日本語力を重視する内容から、両言語ができることを理想としつつも、ベトナム語ニーズのなさとベトナム政府の母語継承支援システムが未整備であるという内容に語りを切り替えている。この切り替えは筆者との相互行為によりもたらされたことがデータでうかがえ、さらにそこで語られた内容から、マイノリティ言語話者の日本語力の重要性を主張するAFさんの継承語教育観は、自ら指摘したニーズやシステム不足といった社会的現実の影響を受けて形成されていったと読み解くことも可能であろう。

7．おわりに

ライフストーリー手法にあるマスターナラティブ、モデルストーリー、エピファニーに着目することで、3名のベトナムへの自己肯定意識の形成過程が明らかになり、親子のベトナム語使用に言及した語りからは、親との交渉過程でストラテジー等を駆使しコミュニケーション力を高めていることが確認された。さらに聞き手との相互行為に着目してデータを見ていくと、3名それぞれに日越両国を行き来するバイリンガルとしての意識が垣間見えたと同時に、親を加えた4名の語りから、それぞれに内在しているベトナムというルーツをアピールする過程には、同じ背景、エスニシティを持つ他者に向けた視線や、日本においてマジョリティに属する人々から向けられた視線に対する意識が潜んでいることが浮き彫りになった。また、バイリンガル育成には本人や親、コミュニティのみならず、文化理解の機会提供や母語継承システムの支援を必然とするための、受入れ社会側への働きかけが重要であることも改めて示唆された。

成人の難民2世を扱った本研究により、新しい在日ベトナム人像を多少なりとも描くことができたと考えるが、事例の少なさ、協力者の属性、また親への調査依頼時に触れた北部経験者という聞き手の属性の影響により、考察したデータに特殊性がある点は否めない。今後は聞き手個人の存在が語りに与える影響を内省しつつ、本研究で得られた結果についてより深い考察を続け、あらゆる言語話者のバイリンガル育成が可能となる社会のあり方を示すことを課題としたい。

表2　インタビューデータ表記記号

データの表記	記号	表記例
同時発話	//	B：先生も変わるじゃない// ＊：うん// ですか
沈黙（ドット1つで1秒）	（・）	C：もう（・・）4年ぶりですかね。
疑問符、上昇音調	？	B：なんか同世代？の友達はなかったんですけど
笑い	(笑)	B：えっ、みたいな (笑)
日本語訳、その他補足事項	（　）	＊：ベトナムへはĐi（行く）？、Vê（帰る）？

注

1）財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部資料によると、正確な受入総数は8,656人となっている。http://www.rhq.gr.jp/japanese/know/ukeire.htm（2010.3.1 アクセス）

参考文献

川上郁雄（1991）「在日ベトナム人子弟の言語生活と言語教育」『日本語教育』73号　日本語教育学会
川上郁雄（2001）『越境する家族―在日ベトナム系住民の生活世界』 明石書店
川上郁雄（2007）「多元化する在日ベトナム人」『アジア遊学』144　勉誠出版
国際日本語普及協会（1993）『日本に定住したインドシナ難民の母語の保持と喪失に関する調査研究　報告書』 社団法人国際日本語普及協会
桜井厚（2002）『インタビューの社会学』 せりか書房
桜井厚編（2003）『ライフストーリーとジェンダー』 せりか書房
桜井厚、小林多寿子編（2005）『ライフストーリー・インタビュー』 せりか書房
桜井厚（2010）『首都大学東京大学院2009年度後期集中講座講義録』
西尾珪子（1986）「姫路・大和定住促進センターおよび国際救援センターにおけるインドシナ難民に対する日本事情教育」『日本語教育』65号　日本語教育学会
長谷川朋美（2009）「在日ベトナム系バイリンガル児童の言語能力」『MHB研究会2009年度大会』予稿集　MHB研究会
法務省入国管理局（2010）平成21年度在留外国人統計　報道発表資料
山口恵理（1998）「在日ベトナム人年少者の日本語・母語の語彙能力に関する一考察」『人間研究』34号　日本女子大学